

IPCC総会 左京で8日開幕

温暖化防止へ 指標改定議論

「気候変動に関する政府間パネル」(IPCC)の第49回総会が5月8日、京都市左京区の国立京都国際会館で開幕する。2020年以降の地球温暖化対策を定める国際的枠組み「パリ協定」を着実に進めるため

温室効果ガス(GHG)の排出量などの算定方法に関するガイドラインについて、各国の科学者や政府代表者が議論して採択する予定。市民向けの関連イベントも催される。

パリ協定では、参加する195の国や地域に、GHGの排出量や森林などによる吸収量をまとめた目録を作成するよう求められている。

目録は排出量などを算定するための係数を定めたガイドラインを元に行うことになっているが、現行のものでは06年に定められており、新たな技術や生産プロセスが生まれた現在の排出・吸収源を十分にカバーできていないなどの課題がある。総会は12日まで行われる予定で、最新の科学的知見に基づいてガイドラインを改定し、方法論報告書としてまとめる。

総会の期間に合わせて関連イベントも行われ、京都市や京都大は気候変動や脱炭素社会の実現などをテーマにした公開シンポジウムやワークショップを開く。



総合地球環境学研究所
安成哲三所長に聞く

「温暖化対策を進めるための良いガイドラインがあれば、市民にも関心を持ってほしい」と語る安成所長(京都市北区・総合地球環境学研究所)

成哲三所長(71)に、総会の意義や期待を聞いた。(聞き手・山田修裕)

総会では温室効果ガス(GHG)の排出・吸収量を算定するためのガイドラインの改定が議論される。

今回、各国のGHG削減の数値目標など政治的、具体的な動きが決まるわけ

成哲三所長(71)に、総会の意義や期待を聞いた。(聞き手・山田修裕)

総会では温室効果ガス(GHG)の排出・吸収量を算定するためのガイドラインの改定が議論される。

今回、各国のGHG削減の数値目標など政治的、具体的な動きが決まるわけ

成哲三所長(71)に、総会の意義や期待を聞いた。(聞き手・山田修裕)

総会では温室効果ガス(GHG)の排出・吸収量を算定するためのガイドラインの改定が議論される。

今回、各国のGHG削減の数値目標など政治的、具体的な動きが決まるわけ

脱炭素化考える機会に

けではないが、ガイドラインは各国が現状をどう認識し、努力できるかを考える上で重要だ。昨年、環境省などが運用する地球全体のGHG観測衛星「いぶき2号」が打ち上げられるなど、GHG算出に関する科学的知見も年々新しくなる。データの質を高め、より精緻な指標をつくる必要がある。

「Gを減らせ」と言われても、具体的にどうすべきか戸惑う途上国もあるだろう。海面上昇や生態系、農業などへの影響は途上国にこそ大きく、より正確な指標ができれば、協力を得られる期待が大きくなる。ガイドラインでは基準を細かく定めることになり、それに対応することは国によっては煩雑かも

「IPCCは京都議定書を採決した気候変動枠組条約締約国会議(COP)とは異なるが、COPの元になる科学的報告書を出している。温暖化対策の活動の一環としてみれば、京都で開かれる意味は大きい。ヨーロッパの大規模な反温暖化デモなどを見ても、国によって市民意識の温度差はあると感じる。今回、脱炭素化を進めるシンポジウムなど市民が参加できる関連イベントもある。温暖化について考えてもらう良い機会になるのではないか。」